

令和 2 年 5 月 25 日現在

機関番号：11101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02802

研究課題名（和文）複数の助動詞が生じる右方移動構文の内部構造と派生メカニズムの解明

研究課題名（英文）Elucidation of the internal structures and derivations of the rightward movement constructions with a cluster of auxiliary verbs

研究代表者

木村 宣美（KIMURA, NORIMI）

弘前大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：90195371

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：属格表現が後置される後置文では、仮説「属格表現を伴う名詞句全体が移動する。」を仮定することで、移動と削除に基づく分析の問題点を克服することができる。空所を伴う後置文（「移動+削除」分析）と空所を伴わない後置文（「削除」分析）は区別されなければならない。Beの語彙的特性の違い（beingは動詞で、beenは助動詞で、beは動詞あるいは助動詞である。）を仮定することで、beの語彙的特性の帰結として、動詞句削除の記述的一般化に説明を与えることができ、複数の助動詞が生じる倒置文等の右方移動構文の内部構造や派生に対して、述語を主要部とする小節構造に基づく述語句分析を提案することが可能になる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

Chomsky (2013, 2015) が提案するミニマリスト・プログラム (MP) の枠組みにおいて、言語学的に例外的あるいは周辺の分析されることが多い右方移動構文に焦点をあて、仮説「連結詞beは助動詞beと動詞beに語彙的に区別される。」を仮定するフェイス理論に基づく分析を提案し、その妥当性を検証した。本研究により、未解決な問題が多いと分析されることのある右方移動現象のなかで、特に、経済性原理及びbeの語彙的特性の観点から、複数の助動詞が生じる右方移動構文の内部構造と派生メカニズムを明らかにするとともに、フェイスをvPとCPとするフェイス理論の構築に寄与することができる。

研究成果の概要（英文）：We can overcome the problem of the analysis based on the movement and deletion of right-dislocated (RD) sentences, that is, a genitive phrase cannot move by Left Branch Condition, assuming the hypothesis where the whole NP with a genitive phrase moves in the sentence with a genitive phrase right-dislocated. We must distinguish the gapped RD sentences analyzed by movement and deletion from the gapless RD sentences analysed by deletion operations. We can explain a descriptive generalization of VP deletion, that is, being must be elided, as a consequence of the lexical properties of be, and we can propose the Predicate Phrase analysis, where predicates are headed in the small clause structures for the internal structures and derivations of the rightward movement constructions with a cluster of auxiliary verbs, assuming the different lexical properties of be, where being is a lexical verb, been is an auxiliary verb, and be is a lexical verb or an auxiliary verb.

研究分野：英語学

キーワード：右方移動構文 右方転移 動詞句削除 倒置文 Beの語彙的特性 複数の助動詞 内部構造 派生

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

ミニマリスト・プログラム(Minimalist Program: MP)で仮定されているフェイズ (phase) は、どのような範疇で、また、どのように定義されるのかという問題 (cf. Citko 2014) は、普遍文法 (UG) の解明及び構築の際に、解明されなければならない言語学的に重要な問題であり、Chomsky (2000) の Minimalist Inquiries: The Framework 以降、基本的な統語操作である「併合 (Merge)」と「フェイズ」に基づく様々な分析が提案され、国内・国外において、フェイズ理論に基づく分析の精緻化に向けた研究が行われていた。

Bošković (2014) は、フェイズ理論に基づく移動や削除の規則適用に関して、フェイズとフェイズ主要部 (heads) の補部 (complements) のみに削除が適用されると主張している。この研究では、be 移動 (shift) を仮定し、動詞句領域 (domain) を支配するフェイズ AspectP が削除されるという動詞句削除 (VP deletion) 分析が提案されているが、AspectP が何故フェイズとなるのかについて、原理だった説明を欠いていることを、日本言語学会第 152 回大会 (2016) で指摘した。また、Bošković (2014) の動詞句削除分析の不備は、be 移動を仮定することにあることを、英語語法文法学会第 23 回大会 (2015) で指摘した。

フェイズ理論を、より一般的で単純化するためには、連結詞 be を語彙的特性 (lexical properties) に基づき 2 種類に分類することが重要であることを、複数の助動詞 (a cluster of auxiliary verbs) が生じる文の動詞句削除の分析に基づき、明らかにしてきた。MP のフェイズ理論の精緻化のために、言語の経済性原理の観点から、規則適用の領域として中心的な役割を与えられているフェイズをどのように定義するのかという問題に詳細な検討を加えることが必要であった。

2. 研究の目的

【概要】

Minimalist Program (MP)では、普遍文法 (Universal Grammar: UG) において、移動や削除等の規則の適用、音韻解釈と意味解釈のための統語 (形式) 情報の転送 (transfer) は、語 (句) から成るまとまり、フェイズ (phase) である vP や CP に基づき、行われると仮定されている。本研究では、仮説「連結詞 (copula) be は助動詞 be と動詞 be に語彙的に区別される。」を仮定するフェイズ理論の枠組みで、複数の助動詞が生じる右方移動 (rightward movement) 構文の内部構造 (structure) と派生 (derivation) メカニズムに対する説明的妥当性のある分析を提案することを目的としている。

【これまでの研究成果】

(1) 動詞句削除と法助動詞 must の陳述緩和的・根源的意味

動詞句削除において法助動詞 (modal) のみが削除されずに生じる時、陳述緩和的 (epistemic) 意味ではなく、根源的 (root) 意味が好まれることが、浅川・鎌田 (1986) や今西・浅野 (1990) で指摘されている。(1) John must be eating already, and Bill { a. must be, b.*must }, too. (2) John must be a good boy, and Bill { a. must be, b. must }, too. ここで解明されなければならない問題は、法助動詞には陳述緩和的・根源的用法があるにもかかわらず、(1b, 2b) のように、複数の助動詞が生じる文の must のみが削除されずに生じる時、何故、根源的意味が好まれるのかという問題である。この問題に対して、仮説「連結詞 be には助動詞 be と動詞 be がある。」(Williams (1984), Kaga (1985)) を仮定することで、動詞句削除と法助動詞 must の陳述緩和的・根源的意味の相関の違いに説明を与えることができることを、英語語法文法学会第 23 回大会 (2015)での研究発表、木村宣美 (2016)「述語削除と法助動詞 must の意味」弘前大学人文学部『人文社会論叢 (人文科学編)』第 35 号で指摘した。連結詞 be には、語彙的特性に基づき、助動詞 be と動詞 be があるということに着目し、複数の助動詞が生じる節の動詞句削除を分析すべきであることを指摘した。

(2) 動詞句削除と連結詞 be の語彙的特性

複数の助動詞が生じる節の動詞句削除に関して、being の削除が義務的で、be と been は随意的であることが指摘されている。(Sag 1976, Akmajian, Steele and Wasow 1979) (3) Betsy must have been being hassled by the police, and Peter { a. must have too, b. must have been too, c.*must have been being too. } (Sag 1976) Aelbrecht and Harwood (2015) は、機能範疇 (functional categories) の補部に vP を仮定し、being のみが削除されるとの規定 (stipulation) に基づく動詞句削除分析を提案しているが、Bošković (2014) の分析と同様に、原理だった説明を欠いている。これらの研究とは異なり、be の語彙的特性に着目した本研究の分析を仮定することで、1) be 移動を仮定する必要がなくなる、2) being の削除が義務的で、be と been の削除が随意的であるという現象は、being が動詞で、be と been が助動詞であることの帰結として説明できる、3) vP を支配する一番上位の AspectP がフェイズになると規定することなく、vP をフェイズとする動詞句削除分析を提案することが可能となることを、日本言語学会第 152 回大会 (2016) で指摘した。

【研究成果の発展】

『句構造の非対称性・線形化と構造的依存関係に関する理論的・実証的研究』(平成 22 年度 - 平成 24 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 課題番号 22520487) では、右方移動現象の分析に

に基づいて、Citko (2005, 2011) が提案する平行併合 (Parallel Merge) の精緻化が必要であること、統語特性及び線形化を統語部門あるいは感覚運動体系のいずれの部門で処理するのが最適であるのかを検討する必要があること、『右方移動現象の分析に基づく併合と感覚運動体系における線形化のメカニズムの解明』(平成 26 年度 - 平成 28 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 課題番号 26370557) では、例外的あるいは周辺の取り扱いを受けることが多い右方移動現象を MP の枠組みで精緻化を行い、基底で生成され、Kayne (1994) の LCA (Linear Correspondence Axiom) に従い、線形化がなされることを指摘した。これまでの右方移動現象に関する研究成果に基づき、複数の助動詞が生じる右方移動構文の内部構造と派生メカニズムに考察を加え、経済性原理を満たすフェイズ理論を構築し、普遍文法の解明及び構築に寄与することを目指している。

3. 研究の方法

本研究の目的を達成するために、【平成 29 年度】be 移動、動詞句削除、使役・知覚動詞補文における助動詞の分布、複数の助動詞が生じる節の内部構造と派生メカニズムの調査及び分析、【平成 30 年度】右方移動構文 (there 存在文、文体的倒置文) の内部構造と派生メカニズムに基づく検証と精緻化、【平成 31 年度】右方移動構文 (as 挿入節、so 倒置文、比較倒置文) の内部構造と派生メカニズムに基づく検証と精緻化の手順で、研究を実施する。研究代表者のみで実施される研究において、研究が当初の計画どおりに進むように、研究を実施する様々な段階で、批判的な検証作業を行いながら、着実に研究を遂行する。

・研究計画

(1) 平成 29 年度

Jackendoff (1972)、Akmajian and Wasow (1975)、Emonds (1976)、Akmajian, Steele and Wasow (1979)、Bošković (2014) 等の be 移動を仮定する分析と Williams (1984)、Kaga (1985)、木村 (2015, 2016) 等の be 移動を仮定しない分析を幅広く調査する。

動詞句削除や使役動詞補文・知覚動詞補文における助動詞の分布を幅広く調査する。

1) と 2) の調査に基づき、仮説「連結詞 be を助動詞 be と動詞 be に語彙的に区別する。」を仮定するフェイズ理論のもとで、複数の助動詞が生じる節の内部構造と派生メカニズムの包括的な調査及び分析をする。

(2) 平成 30 年度

There 存在文や文体的倒置文の諸特性の包括的な調査及び分析に努め、右方移動構文の内部構造と派生メカニズムの解明に関わる統語的・意味的特性を抽出する。

There 構文や文体的倒置文の内部構造と派生メカニズムの解明に関わる抽出された統語的・意味的特性に基づき、仮説「連結詞 be を助動詞 be と動詞 be に語彙的に区別する。」を仮定するフェイズ理論のもとでの複数の助動詞が生じる右方移動構文の内部構造と派生メカニズムに対する分析の検証と精緻化をする。

(3) 平成 31 年度・令和元年度

As 挿入節や so 倒置文や比較倒置文の諸特性の包括的な調査及び分析に努め、右方移動構文の内部構造と派生メカニズムの解明に関わる統語的・意味的特性を抽出する。

As 挿入節や so 倒置文や比較倒置文内部構造と派生メカニズムの解明に関わる抽出された統語的・意味的特性に基づき、仮説「連結詞 be を助動詞 be と動詞 be に語彙的に区別する。」を仮定するフェイズ理論のもとでの複数の助動詞が生じる右方移動構文の内部構造と派生メカニズムに対する分析の検証と精緻化をする。

複数の助動詞が生じる右方移動構文の内部構造と派生メカニズムの統語論・意味論的類似点・相違点を説明し、仮説「連結詞 be を助動詞 be と動詞 be に語彙的に区別する。」を組み込んだフェイズ理論の枠組みで、先端的言語理論 MP を構築するため、普遍文法 (UG) の解明及び構築とパラメータ設定の可能性を考察する。

アメリカ言語学会 (Linguistic Society of America: LSA) 等の国際学会で研究成果を発表するために、海外出張 (アメリカ合衆国) を計画している。

・研究方法

【平成 29 年度-平成 31 年度】

(1) 収集された基本的な資料 (be 移動に関わる言語学書、動詞句削除に関わる言語学書、使役・知覚動詞補文における助動詞の分布に関わる言語学書、複数の助動詞が生じる節の内部構造に関わる言語学書、複数の助動詞が生じる右方移動構文の内部構造に関わる言語学書、複数の助動詞が生じる右方移動構文の派生メカニズムに関わる言語学書、複数の助動詞が生じる右方移動構文の内部構造と派生メカニズムの解明に関わる言語学書等) から、右方移動構文 (1) there 存在文、2) 文体的倒置文、3) as 挿入節、4) so 倒置文、5) 比較倒置文等) の統語的・意味的特性を抽出し、複数の助動詞が生じる右方移動構文の内部構造と派生メカニズムの解明に向けて、包括的な調査及び分析をする。

(2) (1) に加えて、文献で従来扱われてこなかったデータも言語分析の資料とし、より包括的な言語現象の記述と分析に努めなければならない。日本語に関しては、内省的言語直観により、例文の文法性についての判断を行い、次に、他の日本人にも判断を仰ぎ、多くの例文を集める。英語に関しては、例文の判断を英語の母国語話者に仰ぎ、言語事実の収集に努める。

(3) (1) 及び(2) の過程で収集されたデータに基づき、右方移動構文の統語論・意味論的特性を抽出し、複数の助動詞が生じる右方移動構文の内部構造と派生メカニズムを明らかにする。

(4) (1)-(3) の過程を通じて明らかにされた複数の助動詞が生じる右方移動構文の内部構造と派生メカニズムを綿密に検証し、その背後に潜み、支配・統率している MP の一般原理を探る。

(5) (1)-(4) の複数の助動詞が生じる右方移動構文の内部構造と派生メカニズムを通じて得られた成果から、普遍文法 (UG) の解明及び構築及び言語間の相違を捉える UG のパラメータ設定の可能性を考察する。

4. 研究成果

(1) 「後置された」属格表現等の連体修飾成分の統語特性に基づく後置文

日本語の述語以外の要素が文末に生じる後置文 (RD 文) に対して、(I) 仮説 「属格表現等の連体修飾成分を伴う RD 文では名詞句全体が移動する。」に基づく移動と削除に基づく分析、(II) 空所を伴う (gapped) RD 文に対する「移動+削除」分析と空所を伴わない (gapless) RD 文の「削除」分析を提案した。

RD 文に対しては、2つの節から成る文 (久野 1978) であるとの仮定のもと、「移動と削除に基づく分析」が提案されている。この分析にとって問題となるのが、属格表現等の連体修飾成分を伴う RD 文 (1) である。(1) 君、妹と結婚してくれないか、僕の。(久野 1978) (2) が非文であることから明らかのように、属格表現「僕の」の移動は、左枝条件により、許されないはずだからである。(2) *僕の_i [君、_{ti} 妹と結婚してくれないか]。この問題に対する本研究の分析では、仮説 (綿貫 2006) を仮定し、bi-clausal 「移動と削除」分析を提案した。(1) では、名詞句全体「僕の妹」が移動し、同一性に基づき、「僕の」以外が削除されるとする分析である。(3) (= (1)) 君、(僕の) 妹と結婚してくれないか、[僕の [NP (妹)]] (と)_i [君、_{ti} 結婚してくれないか]。このような「移動と削除に基づく分析」を支持する証拠として、(4)に見られるように「島の効果 (island effects)」が観察されることを指摘した。(4) a. *[あのレストランで _{ti} 子供たちが食べていた魚] は大きかったね、太郎の_i。(複合名詞句制約) b. *太郎は [健一が _{ti} 姉と話していた] から、嫉妬していたね、次郎の_i。(付加詞条件) c. *[太郎と _{ti} 生徒たちが実践している活動] は素晴らしいよね、彼のクラスの_i。(等位構造制約) これは、属格表現が移動していることを表わしている。

「移動と削除に基づく分析」にとっての2つ目の問題は、Shimoyama, et al. (2015) が指摘する、削除が適用される元の文が存在しない RD 文の no-source puzzle である。(5) の host clause には「備前 (が)」が生じるべき位置が存在しない。(5) 学校で小さい会社が無人ヘリを考えているという噂を聞いたよ、備前 (が)。この問題に対して、本研究では、空所を伴う RD 文に対する bi-clausal 「移動+削除」分析 (Tanaka 2001, Abe 2016) と空所を伴わない RD 文に対する bi-clausal 「削除」分析 (Abe 2016, Kimura and Narita 2016) を提案した。2種類の RD 文を支持する証拠として、空所を伴わない RD 文では島の効果が観察されないことを指摘した。(6) a. [あのレストランで太郎の子供たちが食べていた魚] は大きかったね、太郎の。b. 太郎は [健一が次郎の姉と話していた] から、嫉妬していたね、次郎の。c. [太郎と彼のクラスの生徒たちが実践している活動] は素晴らしいよね、彼のクラスの。cf. あのレストランで太郎の子供たちが食べていた魚は大きかったね、[あのレストランで 太郎の[+F] 子供たちが食べていた魚] は大きかったね。(移動を伴わない削除だけにに基づく派生) これは、移動が関与していないことを示している。さらに、2種類の RD 文を支持する証拠として、空所を伴う RD 文では数量詞の作用域に曖昧さが生じる ((7b) は移動に課される島の効果として、非文法的である。) が、空所を伴わない RD 文では作用域に曖昧さは生じないことを指摘した。(7) a. 誰もが _{ti} 言語の履修をしているよ、2つの_i。(誰も > 2つ; 誰も < 2つ) b. *誰もが _{ti} 言語の履修をしているという説明に驚かされたよ、2つの_i。(8) a. 誰もが 2つの言語の履修をしているよ、2つの。(誰も > 2つ; *誰も < 2つ) b. 誰もが 2つの言語の履修をしているという説明に驚かされたよ、2つの。(誰も > 2つ; *誰も < 2つ) これは、移動を伴う RD 文と移動が伴わない RD 文が存在することを示している。なお、この研究は、日本言語学会第 154 回大会 (平成 29 (2017) 年 6 月、首都大学東京南大沢キャンパス) と日本語文法学会第 18 回大会 (平成 29 (2017) 年 12 月、筑波大学筑波キャンパス) で発表した。

(2) Be の語彙的特性に基づく動詞句削除分析

本研究では、be の語彙的特性に基づく動詞句削除 (VP deletion: VPD) 分析、すなわち、be には動詞の be と助動詞の be (Williams 1984, Kaga 1985) があり、語彙的に区別されるとする仮説に基づく VPD 分析を提案した。Be の語彙的特性に基づき、2種類の be を仮定する必要がある

ことを論じ、非定形の *be* の統語範疇に関して、i) 非定形の *being* は動詞で、ii) 非定形の *been* が助動詞で、iii) 非定形の *be* は動詞か助動詞かで曖昧であることを明らかにした。(1) に見られるような、*be* の VPD に関する記述的一般化「(a) *being* は必ず削除されなければならない、(b) *be* と *been* は随意的に削除される。」(Sag 1976, Akmajian, Steele and Wasow 1979) に対して、*be* の語彙的特性に基づく VPD 分析では、(1) *Betsy must have been being hassled by the police, and Peter { a.*must, b. must have, c. must have been, d.*must have been being, } too*、*be* の語彙的特性に基づく分析の帰結 (2) として、説明が与えられることになる。(2) a. VPD において、*being* が義務的に削除されるのは、*being* が動詞だからである。b. 非定形の *be* が随意的に削除されるのは、2 種類の *be* があることの帰結である。すなわち、非定形の *be* が動詞の時には削除されるが、助動詞の時には削除されない。動詞の *be* と *being* が VPD で削除され、助動詞の *be* は削除されないのである。c. *been* が随意的に削除されるのは、*been* が助動詞であることを反映している。助動詞が、通常、VPD の適用を受けて削除されることはないが、別の操作である助動詞省略 (Auxiliary Ellipsis (Akmajian & Wasow 1975)) が適用されて、省略されることがあるからであるとする分析を提案した。

Aelbrecht and Harwood (2015) は、機能範疇の補部に *vP* を仮定し、ellipsis site の the progressive aspectual layer にある *being* のみが削除されるとの規定に基づく VPD 分析を提案し、Bošković (2014) は、フェイズとフェイズ主要部の補部のみに削除が適用されると仮定し、構造 [TP must [VPf 1 have [AspectP 1 bei + en [VPf 2 ti [AspectP 2 ing [VPf 3 be [VP ...]]]]]] と *be* 移動を仮定し、動詞句領域を支配する、一番上位の AspectP がフェイズであるとの VPD 分析を提案している。しかしながら、本研究の *be* の語彙的特性に基づく分析に基づく、Aelbrecht and Harwood (2015) のように、ellipsis site の *being* が削除されると規定する必要はなく、*being* が動詞で、*be* と *been* が助動詞であることの帰結として、説明される。また、Bošković (2014) のように、一番上位の AspectP がフェイズになると規定することなく、フェイズである *vP* に基づく VPD 分析を提案することが可能であることを明らかにした。このように、本研究では、助動詞構造に詳細な検討を加え、複数の助動詞が生じる右方移動構文の内部構造と派生メカニズムの解明に寄与する可能性を示すことができた。なお、この研究は、日本言語学会第 152 回大会 (平成 28 (2016) 年 6 月、慶應義塾大学三田キャンパス) と日本中部言語学会第 63 回定例研究会 (平成 28 (2016) 年 12 月、静岡県立大学) で発表した研究で、日本中部言語学会学会誌 *Ars Linguistica* 25 (平成 30 (2018) 年) に掲載された。

(3) 英語には、(1) に見られるように、2 種類の倒置文、すなわち、主語と助動詞が倒置する倒置文 (subject-aux inversion) と文体的倒置文 (stylistic inversion) がある。(Hooper and Thompson 1973, Emonds 1976, Green 1976, Rochemont 1978, Rochemont and Culicover 1990) (1) a. *Is Mary coming!* b. *More important has been the establishment of legal services.* (1b) のような文体的倒置文の比較節置換・分詞前置・前置詞句置換等は、右方移動規則が適用されて導かれると分析された構文である。このような倒置文に対して、LaCara (2014) は、倒置された *as* 挿入節において、複数の助動詞が主語の前に生じることから、i) 主語と助動詞の倒置では導くことができない、ii) 通常的主語位置には存在しないと分析している。複数の助動詞が主語に先行する構文には、さらに、*than* 比較節・*nor* 倒置文・*as/so* 倒置文・*there* 存在文等がある。(Milsark 1974, Potts 2002, Toda 2007, Culicover and Winkler 2008, Iwasaki 2010, Park 2012) 本研究では、3 つの仮説 [(I) *be* は上昇動詞である (Stowell 1978, Heggie 1988), (II) *be* は小節を補部にとる (Stowell 1978, Heggie 1988, Samko 2014), (III) *be* には動詞の *be* と助動詞の *be* がある (Williams 1984, Kaga 1985)] と倒置文の基底構造 [e] TENSE / (Modal) (have) (been) [Predicate Phrase (PP) Subjects (Predicates)] (predicates: *being*, *V-ing*, and *V-en*) に基づく述語句分析を仮定することで、複数の助動詞を伴う倒置文の特性を適切に捉えることができることを指摘した。(2) a. **There were being many people silly.* b. *There were many people being silly.* (Milsark 1974) (3) a. **There are some classy dames going to come with us.* b. *There are going to be some classy dames coming along.* (Stowell 1978) [cf. Heggie 1988, McCawley 1988] (2-3) の文法性は、本研究が仮定する倒置文の基底構造と述語 (predicates) の種類に基づき、説明を与えることができる。(2-3) の文法性は、PP 内の述語が *being* でなければならないことの帰結である。この分析に従うと、複数の助動詞が生じる倒置文では、主語が PP の基底の位置に存在し、述語が演算子移動と削除規則の適用を受けると分析することができることを指摘した。なお、このテーマを更に探究することで、2 種類の助動詞倒置文の内部構造と派生メカニズムの解明に寄与することが期待される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 木村宣美	4. 巻 25
2. 論文標題 BEの語彙的特性に基づく動詞句削除分析	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Ars Linguistica	6. 最初と最後の頁 34-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木村宣美	4. 巻 154
2. 論文標題 名詞の修飾辞を伴う後置文：移動と削除に基づく分析	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本言語学会第154回大会予稿集	6. 最初と最後の頁 318-323
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 木村宣美	4. 巻 18
2. 論文標題 「後置された」連体修飾成分の統語特性に基づく後置文の分類	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本語文法学会第18回大会予稿集	6. 最初と最後の頁 246-253
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 木村宣美
2. 発表標題 名詞の修飾辞を伴う後置文：移動と削除に基づく分析
3. 学会等名 日本言語学会第154回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 木村宣美
2. 発表標題 「後置された」連体修飾成分の統語特性に基づく後置文の分類
3. 学会等名 日本語文法学会第18回大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考